

平成15年6月10日

## 「仲仕組創立總會」の碑—あわら市春宮一丁目

性海寺住職 印牧 邦雄

芦原温泉駅の西南約一キロ、竹田川と宮谷川の合流点に建つ石碑。凝灰岩製の高さ二・五メートル（本体1・8メートル、土台0・7メートル、横幅0・8メートル）奥行き0・3メートルの碑である。

初め金津駅に近い竹田川の船着場を臨む場所にあったが、いつ頃か坂の下（現花乃杜）源泉寺境内へ移され、さらに現在地に移されたと伝えられる。<sup>頃</sup>

碑首に「仲仕組創立總會之碑」と篆刻され、碑身の表面には建碑の経緯と意義を楷書で認め、裏面、側面には発起人、組員、寄付者の氏名が刻まれている。

碑身に使用されている石材は、台石に比べ石質が粗く、建碑後の経過年数の割に風化が進捗し、欠落したり判読し難い文字が少なくない。



碑文には大要次の如く認められている。意識すると、「明治30年9月、鉄道（北陸本線）が竣工し、汽車が通り始めた。これから物資の流通に一大変革が起こるのであろう。都から千里も離れた寂れた僻地が鉄道開通により、たちまち人が集まり住み、多数の客が訪れ、商業は盛んになるであろう。そして産業を興すことによって国恩に報いることができるであろう。」

漢詩（意訳）

山をうがち、川に橋をかけ、鉄道は完成した。煙を飛ばし、汽笛を鳴らして、汽車はまたたくまに走る。望む所に鉄道が開通し、はるばる物質を運ぶ。鉄道が日ましに栄えんことを。屹立せよ一片の石。

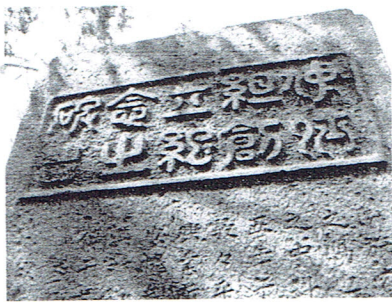
明治34年7月、鷗村小史により本碑文が作られた。鷗村とは、藩校明道館等の教師を勤め、県初の「撮要新聞」を編集発刊した富田厚積（あつみ）の号ではなかろうか。号を鷗波（おうは）などと称し、辞官後、詩文に専念し、明治40年（1907）に没している。

本文が仲仕組に届き、本石碑の裏面に設立者8名、発起人40名、側面に土地寄付者1名の氏名が刻まれている。

ちなみに金津仲仕は、竹田川の河岸に設けられた河戸（こうど）と呼ばれた船着場一階段状をなし、13箇所あったといわれる一で北前船の寄港地三国港へ物資を送ったり、運び込んだりする荷役に携わっていた。明治30年（1897）北陸本線福井—小松間が開通し、金津駅が完成すると、物流がこれまでの水運から陸運に転換した。この一大変革で仲仕たちの生活は深刻な影響を受け、失業の危機にさらされた。このような時に仲仕組が創立された

ことは、仲仕たちにとって、まことに“旱天の慈雨”であった。この変革期に水陸の荷役に携わっていた金津の仲仕たちは、新たな物流組織を作ろうと組合を創立、列車に積み込む荷役作業を請け負うことになった。本碑に名を連ねた数多の氏名から、その恩恵に与ろうとした人たちがいかに多かったかが窺われる。これ等の人たちが浄財を出し合い土地を寄付し、仲仕組創立を顕彰するとともに、総会を開催し、喜びあったことを後世に伝えるべく本石碑を建立したのである。

本石碑について、建立後長い年月が流れる間に、そしてまた余り人目に触れることのない場所にあったためか、町民に忘れ去られるか、見逃されて来たのは、まことに残念なことである。交通の要衝、金津の歴史を物語る貴重な歴史的記念物であるので、先人たちが本石碑を建立した意図をくみとり、顕彰保護するべきと提言したい。



#### 【資料等】

長谷川 勲氏 「金津の夜明け・・・北陸線開通、金津駅開業の道のり」

牧田 孝男氏 「竹田川のめぐみとともに」談、福井新聞

佐川 京子氏 関係資料収集提供

井上 律夫氏 印字原稿作成、写真撮影